

高等教育研究センター かわらばん



博士たちの翼

トランスフェアラブル・スキルズ

「大学の先生になったら、日長 一日、本を読んでもいられると思っ
ていた」「研究どころじゃない、
今や教授は小企業の社長のように」
— 大学教員のそんなボヤキをよく
耳にするようになりました。時代
の変化、社会からの期待の変化、
などなど、理由は複合的ですし、

その是非も、大学のなかから常に
問うてゆかねばならないと思いま
す。ただし、この現状において、
即戦力になる人材を大学教員とし
て採用する傾向は、今後も強まっ
ていくと思われまます。

戦力になるための能力開発が求め
られていることになりました。英国
では、博士課程を通じて身に付け
るべき能力のリストが提供されて
います(裏面をご覧ください)。

それらの能力は、日本ではむしろ、
博士たちがアカデミア以外のキャ
リアパスをめざすために必要と論

授業でぜひご紹介ください 「名古屋大学学生論文コンテスト」

アカデミックライティングを早いうちから体験して欲しい—そんな
思いで昨年度に立ち上げた「名古屋大学学生論文コンテスト」。今年
度も、以下の要領で開催の運びとなりました。教職員の皆さまには、
ぜひ、折をみて学部学生に応募を勧めただけたらと思います。昨年
は、基礎セミナーの期末レポートと連動させた例もありました。な
お今年度は、学部1、2年生対象の「論文書き方講座」も開催いたし
ます。卒論指導の一環としてご活用いただけますので、こちらも併
せてご案内ください。

「2008年度名古屋大学学生論文コンテスト」

昨今の社会問題から自由にテーマを選択し、書籍・文献を踏まえて
論じるものとする。

応募資格：本学の学部学生

分量：A4用紙12枚以内、1枚あたり1500字程度、図表・注・
参考文献含む

応募期間：2008年12月1日～2009年1月16日

審査：本学教員

詳細はホームページにてご確認ください

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ronbun/>

「論文書き方講座」

第1回 2008年9月30日(火) 14:00～15:30 全学教育棟1階

第2回 2008年11月18日(火) 16:30～18:00 文系総合館7階

(同一内容です)

講師 近田政博(高等教育研究センター准教授)

じられてきています。しかし実際
のところは、アカデミックカノン
アカデミックかを問わず、博士号
取得者が社会のいたるところで活
躍してゆくために必要な能力とい
えるのです。

教育のスキルだけは大学(学校)
に特有なんじゃないの?と思われ
るでしょうか。いいえ、そんなこ
とはありません。企業においても、
部下のメンタリングや、社内研修
など、教える機会は数多くめぐっ
てくるといいます。

また、教育をコミュニケーション
の形態と考えることによって、
教育のスキルを広く応用すること
もできます。シラバスを例にして
みましょう。計15回の授業の内容
を初めに学生に見せておくと、そ
の後どのような位置に自分の学習
があるのかを把握でき、学習効果
が高まると言われています。講演
の冒頭で、このあとの話の流れを
一覧できるスライドを見せること
と、よく似ていると思いませんか。

海外で transferable skills (移転
可能なスキル) と呼ばれているの
も頷けます。たくさんスキルを
身に付けなければならぬのでは
なく、応用力や柔軟な発想力が求
められているといえるでしょう。

もうひとつ大事なことは、大学
院生やポスドクにこのようなスキ

ルを身に付けてもらえば、大学の
教育・研究・社会貢献のいずれも
が活性化するだろうということだ
す。近年のめざましい研究費の増
加に対し、大学教員の増加はわず
かでした。今や大学の研究活動に
欠かせない存在となった大学院生
やポスドクたち。能力開発の機会
を与えて大学でも社会でも大いに
活躍できるような環境を整えるこ
とが、喫緊の課題となっています。
(齋藤芳子)

アメリカの大学改革の最前線を見に行こう

高等教育研究センターでは、コンソーシアム事業の一環として海外研修への参加希望者を募集しています。

参加者には、本年10月22日～25日に米国ネバダ州Renoで開催される大学改革に関わる教職員のためのカンファレンス(2008 POD Network/NCSPOD Conference)に出席し、帰国後に成果を報告していただきます。米国の大学もしくは関連機関への訪問見学調査のために米国滞在を数日間延長することも可能です。他大学教職員との交流もふまへ、ご自身の日頃の実践を見つめ直してみませんか。熱意ある方のご応募をお待ちしています。

募集人員：教員若干名

応募方法：電子メール本文に、氏名・所属・研修への参加動機(400字程度)・内線番号・電子メールアドレスの5項目を記して、info@cshe.nagoya-u.ac.jpまでお送りください。応募締切は2008年8月1日(金)正午です。応募者多数の場合は、個別面談等を行うことがあります。応募の詳細は下記ホームページにてご確認ください。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/pod2008/>

お問合せ：センター事務室(内線5696, 電子メール info@cshe.nagoya-u.ac.jp)

注) POD Networkの詳細はウェブサイト(<http://www.podnetwork.org/>)をご覧ください。

2008年度大学教員準備プログラム 「大学教員をめざす君へ」

日時：9月17日(水)・18日(木) 10時～

場所：全学教育棟1階

対象：本学に在籍する大学院生および研究員など

申込方法など詳細は下記ホームページをご覧ください

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/pff/>

かわらばんへのご意見・ご感想
を裏面のEメールアドレスまでお寄せく
ださい

Curriculum Glossary

カリキュラムにまつわる用語集

移転可能なスキル Transferable Skills

英国リサーチカウンシルズは、その資金援助を受ける大学院生について、研究指導を通じて習得することが期待される技能(スキル)をまとめた声明「大学院生のスキル訓練要件に関する共同声明(Joint Statement of the Research Councils' Skills Training Requirements for Research Students)」を発表しています。この声明では、研究上のスキルやテクニックの訓練が大学院生の能力開発の中核であると前文に述べられたうえで、以下のようなスキルの提示がなされています。

- (A) 研究のスキルとテクニック：批判的思考・分析、概念作成、研究手法、専門分野のトレンド把握、経過の文書化、など
- (B) 研究環境の理解：研究倫理、関連規程、研究資金、研究評価、研究成果の応用・波及、など
- (C) 研究管理：プロジェクト管理、資源や機器の効果的な利用、情報管理と情報公開、など
- (D) 個人的態度・資質：知識習得の意欲、独創性、柔軟性、自己認識、自制心、イニシアティブ、など
- (E) コミュニケーション：目的に適った文章、相手に合わせた手法、研究成果の正当性の主張、理解増進、他者の学習の支援、など
- (F) ネットワーキングとチームワーキング：ネットワーク構築と維持、自己の役割と影響の理解、フィードバックと応答、など
- (G) キャリア・マネジメント：継続的能力開発、雇用可能性の改善、就職機会の発見、自己表現、など

これらのスキルは、まずは博士学位論文を完成させるために、ひいては研究者として成功してゆくために必要不可欠なものです。しかし、研究者にならずとも、起業したり、政策立案に携わったり、物書きになったりと、博士の活躍できる場面は広がってきました。そして、そのような場面においても上記のスキルが有効であることから、「移転可能なスキル (transferable skills)」という呼び名が定着しています。研究を通じて身に付けうるスキルの幅広さを、ぜひ、日本の大学院生にも伝えていきたいと考えています。(齋藤芳子)

北京大学の国際化戦略

施 曙光 (高等教育研究センター客員教授/北京大學教授)

北京大學は、最近10年間のうちに国際的な知名度を高めることにも成功してきました。たとえばTimes社のHigher Education Supplement誌による世界ランキングにおいて、2005年に17位、2006年に15位を占めています。こうしたランキングに一喜一憂する必要はありませんが、短期間のうちに世界的名声を獲得してきた証のひとつといえるでしょう。今回は、その舞台裏を簡単に紹介したいと思います。

まず、教員と学生も国際化への共通認識を深めることを目指して、あらゆる面での国際化を掲げた中長期の発展計画を策定しました。つぎに、名古屋大学の提唱によるAC21(国際学術コンソーシアム)を含む国際的な大学連盟にいくつも加入し、加盟大学との協力関係を構築しました。世界の一流大学と共同で、教育プログラムの作成や、教員や学生の派遣・受け入れも行ってきました。相手校は、スタンフォード大、イエール大、ハーバード大、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、モスクワ大学、パリ大学、東京大学や早稲田大学などです。協定の覚書には、サマースクールや共同学位などを通じた双方向の

教員・学生交流が謳われています。外国の財団やNGOによる財政面での学術支援も受けています。たとえば、北京大學アジア太平洋研究所には韓国高等教育財団から毎年20万米ドル、同ヘレニズム研究センターにはギリシャの船舶王から毎年10万ドルといった具合です。学内における国際行事の開催も今では年平均50を数えます。なかでも毎年恒例となった「北京フォーラム(北京論壇)」は影響が大きく、3000人の研究者が世界中から訪れます。また、海外で開催される学会への参加も推奨され、海外を訪問する北京大學の研究者は毎年5,000人以上に上ります。このほか、世界的に著名な研究者や外国元

首を招いての講演会も積極的に行われています。国際文化祭(ICF)や大学交流日(U-Day)を設け、外国の大学との個別の交流促進も図られました。大学交流日とは、大学の学長あるいは首脳を含む使節団が北京大學のキャンパスを訪問し、一日交流プログラムを通じて国際的な文化理解を深めるといったものです。2001年以降の大学交流日の開催は20回近くに上り、早稲田大學との交流日は「早大日」と呼ばれています。北京大學が世界ランキングの上位に位置できるのは、こうした多角的かつ継続的な国際化戦略が功を奏した結果だといえます。(翻訳 近田政博)

読んでおきたい

この1冊

Great Books on University

掛谷英紀 著

『学者のウソ』 ソフトバンク新書 2007年

学者がウソつき呼ばわりされ、社会から糾弾されるとしたら、どのようなときでしょうか。本書では、いくつかの事例について、誰が、どのようなウソをついたのかが、明確に述べられています。

事例として挙げられているのは、「ゆとり教育」、「ダム論争」、「少子化論争」などの言論に含まれる誤りや不誠実さです。これらの「ウソ」は二種類に大別され、一方は「専門バカ」で「世間知らず」であ

るがゆえに陥ってしまった過失によるもので、ゆとり教育論者が発想力を価値ある個性と認め、基本的な学力を個性と認めなかったことが例として挙げられます。他方は、明らかな故意による確信犯的なもので、論者にとって都合のよい統計データのみに基づく言説がそれに含まれます。著者はこれらの不正を暴き、真実の学問を提示し、不正の社会背景に潜む問題点を指摘し、それらの問題を解消する具体策

として「言論責任保証」を提案しています。そのエッセンスは、事実や理論の正当性がすぐには確認されない論争的テーマで発言や出版物を発行する場合、その論争が決着するまで見定めてから評価し、その評価に応じて利益を得るということにあります。筆者はすでに2004年に、この事業を実施するNPO法人を設立し、活動を始めています。

つまるところ筆者は、社会に対する影響力が大きい「学者のウソ」を問題にしていると言えます。自らの学説が社会に対して発信された場合に、どのような影響を与えうるのか。学者がウソをついたと言われるときの条件が示されている本書は、興味深い一冊となるでしょう。(久保田祐歌)

高等教育研究センタースタッフ(2008年7月現在)

センター長	戸田山和久
	専門領域：科学哲学
教授	夏目達也
	専門領域：高等教育学、技術・職業教育論
准教授	近田政博
	専門領域：比較高等教育学、初年次教育
准教授	中井俊樹
	専門領域：大学教授法、高等教育マネジメント
助教	齋藤芳子
	専門領域：科学技術社会論

特任講師	安田淳一郎
研究員	久保田祐歌
<平成20年度 海外客員>	
	施曙光 (中国・北京大學)
	ジョディ・ナイキスト (米國・ワシントン大学)
<平成20年度 国内客員>	
	佐藤浩章 (愛媛大学)
	米澤彰純 (東北大学)
	館 昭 (桜美林大学)

名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601 名古屋市中種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695
E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/